

OTANIing

大谷の「今」を伝える。「未来」へ繋げる!

軽音楽部全国制覇!



一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり。 学校長 飯山 等

このコロナ禍は図らずもオンライン・ZOOMなどの非対面の機能とその有効性を、ついこれでいいじゃないかと思わせるほどに認知させることとなりました。しかしよく考えてみると

それは、我々の方が関係すること、交わること、接すること、集い合うことを、知らず知らずのうちに薄めてしまっていて、それで十分と思うように慣らされてしまったということではないかとも思えます。身を運んで直に言葉を交わすこと、息づかいを感じ合うこと、手を添え合って一つのことを成すということ、それほどのたいせつなこととして感じなくなり、我々自身をそのようなあり方に馴致させることを以て、新しい日常と位置づけてしまっている。そのような危うさを感じないわけにはいきません。この感染症にともなう社会の表面に表れてきた諸事象は、我々の社会の、何よりも我々自身の、濃密(こまやか)さの質と量ともの希薄さを露呈させたこととして、わが身に引き当てて考えたいと思います。

「人と生まれた」という表れはどのような内容を混えているのでしょうか。私たちは「意味」の語を「価値・重要性」として受けとめてしまいます。そこから、「できること、役立ち」に自身の存在の肯定感、自尊感情の拠を求め、「できなくなること」を怖れ、抗い、高評価を目指し、維持しようと励みます。私たちがこの「人と生まれた」という表れを、「この私、この世界」として《クローズアップ close-up》する視点で受けとめるとき、そこに期待される「意味」は「価値・重要性」を目指し、それはつねに瓦解の不安に直面しています。

いま私たちの身の回りにはクローズアップがあふれています。居ながらにして、無意識のうちに、そのなかに全身を浸しています。しかし、大寫しにされることによって、視野の外に置かれ、識らずして切り捨てられているものがあります。随分以前のことで、まだ幼かった子どもと大阪の球場にプロ野球を観に行ったことがあります。そのとき、テレビで観るより面白く感じなかったことを覚えています。改めて気づいたことは、テレビがそのシーンに相応しくクローズアップをしてきていたということです。私を感じていた臨場感は、テレビによってもたらされた擬似的なものだったのです。それは野球の楽しみとしては随分と狭められた、言うなれば初歩のものであったとも思うことです。ピッチャーが投げ、打者

が打ち、その球が飛んだ野手の方向を観る。その他は見えない。しかし、場面が広くかつ深くとらえられたとき、その場面の面白さは深まり、増します。他のすべての守備の選手も、壘上のランナーも動いている。それらを視野の中に掬い取り楽しむ。それはclose(=閉じられた、近接した)とは逆の、open(=開いた、広々とした)なあり方、up(=話し手や話題の中心となっている場所の方向に近づく様子)とは逆向きのdown(=話し手や話題の中心となっている場所から離れる様子)と言えるのではないのでしょうか。ここで、《クローズアップ close-up》の対極にある姿勢として、通常英語では使われない《オープンダウン open-down》の語をあえて造語して考えたいと思います。野球場の例にもどれば、身を乗り出して「いまここ」をクローズアップしてとらえるのではなく、身を引いて、座席に腰を落ち着けて、オープンダウンなありかたで、球場の多くの人と「時」と「場」を共有して楽しむということなのです。

「人と生まれた」という事実が表している真相、深層の内容・メッセージは、クローズアップの閉塞感、強迫観念が破られたところに開かれるのではないのでしょうか。「意味」の語が示している、より基本的な地平に立ち帰り、そこから考えることの肝要さを思うことです。「この」と近づく(=up)ことによって、全視野を占める「この私、この世界」。そのような中心に向かう姿勢ではなく、「この」に向かうあり方から身を転じて、「この」が「その」として感取されるところにまで遠ざかる。そこにもたらされる、closeな「この」ではない、openな「その」。真宗の伝統の中で、先人はそのことを、「このままの救いではない、そのままの救い」と伝えてきました。

標題の言葉は『歎異抄』第5条の「親鸞は父母の孝養のためとて、一辺にても念仏もうしたること、いまだそうらず。そのゆえは、一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり。いずれもいずれも、この順次に仏になりて、たすけそうろうべきなり。」によっています。わが父母のためとclose-upすることによって、見えなくしてしまっている世界がある。close-upが欠いてしまったいのちの深層・真相を開く(=openする)。open-downの姿勢の大切さを教えてくださっているように思います。そしてそのとき初めて、そこから始まる「いまここ」との篤い切り結びがあることを、親鸞は先の確かめに続いて、「ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあいだ、いずれの業苦しむりとも、神通方便をもって、ます有缘を度すべきなり」と述べられています。